

博報堂教育財団 第14回「日本研究フェローシップ」成果報告書

I. 研究成果概要

氏名(フリガナ) 在住国名	鋳物 美佳(イモノ ミカ) フランス
所属・役職	ストラスブール大学・専任講師
招聘回(招聘研究期間)	第14回(2019年9月1日～2020年8月31日)
受入機関	国際日本文化研究センター
招聘研究テーマ	型の稽古における意志の経験
研究目的	武道や舞踊で行われている型稽古において、稽古をする者にとって意志はどのように現れるのか(稽古する者は、単なる自動的運動の再生産にとどまらないために、どのように工夫をしているのか)を、インタビューを通して明らかにすること。
研究成果概要	
<p>1. どのように研究を進めたか(具体的に)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・インタビュー(武道家7人、能楽師5人、舞台俳優1人)、およびその分析。 ・稽古見学(柳生新陰流・天道流)、講道体験(柳生新陰流)、稽古体験(天道流)、入門(観世流) ・国際日本文化研究センター共同研究にて発表、議論。 ・国際日本文化研究センターにて「身心技法の実践的・理論的探求」に参加。 	
<p>2. 研究によりどのような知見が得られたか(具体的に)</p> <p>型稽古においては、あるレベル以上になれば、運動は能動(動くぞ)と受動(動かされる)のあわいに中動的に、すなわち自然発生的に現れることが明らかになった。したがってそこにおける意志は、もはや瞬間的な経験ではなく、状況(環境・習慣も含めた身体的条件)と分かち難く現れるものである。さらに上達しようとする者は、この状況と運動をまるごと動かす力が求められる。ここに、単に自動的ではない、自然発生的かつ創造的運動が生じる。</p> <p>また、動きを言葉で伝えることの難しさも、具体的に明らかになってきた。インタビュー協力者は皆、型やわざの名前を運動イメージと結びつけるだけでなく、その内容を更新することを探っている。そこでは名前はいまや動きをグルーピングするための暫定的タグにすぎない。ある人にとってのタグが別の人にとって同じ意味をなすことは難しく、そのためわざの伝達の場面においては「わざ言語」や体感(自己受容感覚)に基づいた教え方が用いられることが多い。また、型の上達のためには、型の名前やその表象イメージに拘泥することは足枷になることもわかった。</p>	
<p>3. 研究成果(予定を含む)</p> <p>○論文(題目, 掲載誌, 発行者, 掲載月, 内容の概略(200字以内))</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Danser par l'intériorité : approche du mouvement dans la philosophie de Maine de Biran, 『フランス哲学・思想研究』第25号, 日仏哲学会, 2020年9月 <p>能では「内面性」によって舞うことが重視される。本論では、この身体感覚を、メヌ・ド・ビラン哲学に依りながら分析した。まず身体技術の伝達過程で使用される「わざ言語」に注目した。これは表象以前のレベルで身体感覚を呼び起こすことを目的とする。次にビランによる運動図式を「わざ言語」の分析に応用することで、表象以前のレベルで身体を動かし、また動きの質を調整する主体的経験が可能となることを示した。最後に、この分析結果は舞における感情の問題を必然的にひらくことを指摘した。</p> <p>○口頭発表(題目, イベントの名称, 日・場所, 内容の概略(200字以内))</p> <ul style="list-style-type: none"> ・A Philosophical Approach to « Craft Language », The 3rd EASJ Conference in Japan, 2019年9月14日・筑波大学 <p>本発表では、「わざ言語」の分析をメヌ・ド・ビラン哲学によって分析した。「わざ言語」とは認知科学の分野で近年研究されている、わざ伝達のための言語表現である。分析の結果、その特徴は、運動感覚に訴え、結果としての運動イメ</p>	

ージを介さずに運動を伝えられること、またそれによって伝えられるものは表象を介さない身体の動かし方であることを示した。

・型稽古の身体論、国際日本文化研究センター共同研究「多文化間交渉における「あいだ」の研究」2020年2月17日・国際日本文化研究センター

本研究プロジェクトの中間報告として行った。武道における型稽古についてのインタビューの進捗状況を報告、分析し、今後の課題を示した。インタビューにおいては、運動を思い描いてから動くのではなく、体感に集中することで自然と動けるという声が聞かれた。そこから、運動を作って確認する記号モデルに対して、運動を作って作る生成的モデルを見る可能性を示唆した。

・柳生新陰流剣術稽古における工夫：行為的直観を手がかりとして、国際日本文化研究センター共同研究「蜘蛛の巣上の無明」、2020年7月10日・国際日本文化研究センター(ZOOM)

稽古には、反復による動きの習慣化と、そのように習慣化された動きを意識する2要素がある。これらの関係を、柳生新陰流剣術の稽古を通して考察した。まず西田幾多郎による行為的直観という概念の解釈につながることを指摘し、『兵法家伝書』およびインタビュー分析を通して、運動が中動的に立ち現れるレベルを開示し、運動の習慣化と意識化は同時に求められうることを明らかにした。

・How to make progress in the practice of Kata, Association for Asian Studies in Asia 2020, 2020年8月31日～9月2日・神戸国際会議場(ZOOM)

能楽師の型稽古における「気づき」の瞬間の構造を、5人の能楽師へのインタビュー分析を通して考察する。気づきには、劇的型とだんだん型があり、インタビューによれば、能楽における気づきは圧倒的に後者が多い。能そのものの抽象的性格、集中への異なるアプローチなど様々な角度から検討し、身体の暗黙知と反省的意識の時間的ずれを明らかにする。

・Analysis of Kata practice using Maine de Biran's philosophy, 2020年9月25日～26日・レーゲンスブルク大学(ZOOM)

型稽古において、わざに名前があることが、稽古者の主観にもたらす効用と危険性について、メヌ・ド・ビラン哲学における記号概念を用いて論じる予定。2月の国際日本文化研究センターでの発表を展開させたもの。

○その他の活動

・柳生新陰流の稽古について、論文1本投稿中。

7月の国際日本文化研究センターでの発表をまとめた内容。英語で執筆した。7月の発表内容に加えて、運動の意識化と習慣化を同時に論じる必要を指摘している。

4. 今後の活動予定

本研究を通して、型稽古においては、運動を状況ごと動かす力が求められていることが明らかになった。また、そのために重要な役割を果たしているのが、想像であることに気がついた。思い描いている風景を身体的運動に還元することが、武道においても能楽においても、求められている。今後は、想像の現実化という観点から、得られたインタビューデータの分析を再度行いたい。

そのうえで、自然発生的であることと創造的であることがいかにして重なっていくのかを、哲学の言説に基づいて分析したい。